

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Haida and Its Genetic Relationship to Na-Dene

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀, 博文 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00010006

ハイダ語（北米先住民諸言語）の系統をめぐって

堀 博文
(静岡大学)

1 はじめに	3.2 形態法における問題点
2 ナ・デネ語族説 (1) — 1990年代まで	3.2.1 人称代名詞
3 ナ・デネ語族説 (2) — Enrico (2004) の検討	3.2.2 動詞形態法
3.1 音対応における問題点	3.3 本節のまとめ
	4 ナ・デネ語族と他の語族の関係
	5 結び

1 はじめに

北アメリカ先住民諸言語の1つであるハイダ語は、主に、カナダのブリティッシュ・コロンビア州沿岸のハイダ・グワーイ (Haida Gwii, 旧称クイーン・シャーロット諸島) とアメリカ合衆国アラスカ州のプリンス・オブ・ウェールズ島などで話される言語である。話者数は、カナダ側 (マセット方言とスキドゲイト方言) は125名 (2016年のカナダ国勢調査による)、そのうち流暢な話者は19名である¹⁾。一方、アメリカ側 (アラスカ方言) の話者数は、アメリカ国勢調査 (2006~2010年) によれば179名である。ただ、それらの数字のほとんどが、話者の自己申告によるものであり、ハイダ語が話せる能力を客観的に調べた上ではない点に注意する必要がある。数字の信憑性に関する多少の疑問はあるものの、それらの方言において、話者のほとんどが80歳を超える高齢者であるゆえに、その存続が極めて厳しい状況にあることは確実である。

さて、ハイダ語は、現在のところ、他の言語との系統関係が証明されていない、いわゆる孤立言語の1つであるとするのが一般的な見方である。しかし、次節以降でみるように、その系統関係については、かねてより多くの議論がなされており、特にその焦点となっているのが、ハイダ語がナ・デネ語族 (2節参照) に属するか否かである。

そこで、本論文では、ハイダ語がナ・デネ語族に帰属するという説の当否をめぐって、ハイダ語の記述研究の進展に応じて1990年代までとそれ以降に分け、それぞれの時代において出された諸説の概観と検討を行なう (2節と3節)。続く4節では、ナ・デネ語族に関する最近の研究の展開を略述し、更に、5節ではハイダ語の系統関係を考究する上での問題点や課題、意義について述べる。

2 ナ・デネ語族説 (1) — 1990年代まで²⁾

ハイダ語がその近隣地域で話されるアサバスカ語族 (アメリカ合衆国アラスカ州, オレゴン州, カリフォルニア州や南西部, カナダ西部など), トリンギット語 (アラスカ州) と系統関係があることは, 古くは18世紀末にフランス人探検家フルリオ (Charles Pierre Claret de Fleurieu) によってその可能性が見出され (Mithun 1999: 307), その後, ボアズ (Franz Boas) やスワントン (John R. Swanton) などによっても指摘された (Boas 1894; Swanton 1908)。しかし, 比較言語学的手法を用いてこれらの言語の系統関係を証明しようと試み, これらの言語がひとつの語族をなすとみて「ナ・デネ語族 Na-Dene」³⁾と名付けたのは, サピア (Edward Sapir) である (Sapir 1915)。

サピアがこれらの言語を比較する際に重きを置いたのは動詞と名詞の形態法であり, それに加えて, 子音 (30組) と母音 (4組) の対応, 更に, これらの言語の間における98の同源形式 (cognate) を示している⁴⁾。サピア (Sapir 1915) は, ボアズ (Boas 1894) やスワントン (Swanton 1908) のように語彙や文法の表面上の類似を根拠とするのではなく, 比較言語学的手法を用いてこれらの言語の系統関係を論じているが, このサピアの説に対し, これらの言語の間にみられる類似性は, 拡散や偶然に起因するのではないかといった懐疑的な見解も出された。例えば, 一時は, これらの言語が系統関係を有すると主張したボアズ (Boas 1920) も, 形態法の類似は拡散によるという立場を示しており, また, ゴダード (Goddard 1920) も相互的な影響による類似の可能性を主張するなど, サピアの説を否定している⁵⁾。

これらの否定的な見解に対し, サピアは, 例えば, 「アサバスカ語, トリンギット語, ハイダ語の間に, 共通にあることが指摘された構造上の根本的特条の, しかも言語的複合体の当の核心にかくされているものを, 『借用』の説をもって説明するのは, まったく当を失していると思われる」(サピア 1957: 208) と反論するなど, 自身の説の正当性を主張している。しかし, サピアの説には, 1930年代になってアメリカ側の研究者の間に存在が知られるようになったイーヤック語が含まれていないこと, 更に, サピアが依拠したハイダ語とトリンギット語の資料に多くの誤りが見出されるなど, いくつかの致命的な問題点が指摘され, 以後, そうした点を含めてナ・デネ語族説が再検討されるようになった。

イーヤック語は, アメリカ合衆国アラスカ州南岸で話される言語であり, その存在は, ロシア側では知られていたものの, その詳細に関する全容が北米の研究者に知られるようになったのはクラウス (Krauss 1965) などの一連の研究によるところが大きく, それらの貢献により, 系統的にはアサバスカ語族と近い関係にあることが明らかになった。サピアは, ナ・デネ祖語から, まず, ハイダ語が分かれば, 残るアサバスカ語族とトリンギット語が更に分かれたとみていたようであるが (Sapir 1915: 558), イーヤック語が加

わったことにより、アサバスカ語族とトリンギット語の関係は、サピアが想定したよりも一層遠く位置づけられるようになった。

一方、ハイダ語とトリンギット語については、サピアが依拠していたのは、いずれもスワントンの記述（トリンギット語は Swanton 1911a, ハイダ語は Swanton 1911b）であるが、ハイダ語に限っていえば、このスワントンの記述は、阻害音（閉鎖音と破擦音）における無声無気音、無声有気音、放出音の対立が正確に捉えられていないなど、音声表記に大きな問題があり、加えて、文法分析においても多くの誤謬が含まれている。とりわけ音対応をナ・デネ語族説のひとつの証拠としていたサピアが、正確性に欠けるスワントンの記述をもとにしていたのは、その説の致命的な欠点であると言わざるを得ない。後にクラウス（Michael E. Krauss）が、サピアのあげている対応の多くが「誤表記、誤分析、誤訳と誤解のいずれか、あるいは、それらのすべてに基づく」（Krauss 1979: 841）と断じたのは、1970年代からハイダ語の研究が進展するにつれて、スワントンの記述が正確性において問題点が多いと認識されるようになったからである。

ちなみに、サピアは、ナ・デネ語族説を唱え始めた時は、ハイダ語に直接触れる機会がなかったが、後に、短時間の調査に基づく音声論（と一部形態論）に関する短い論文（Sapir 1923）を著わしている。もとより、その論文はハイダ語に関する共時的な記述であるゆえに、トリンギット語の類別辞や音節にかかるピッチ、また、アサバスカ語族の母音の長短の違いに相当するものがハイダ語にもあることに言及してはいるものの、それらをもとに自身のナ・デネ語族説を検討し直しているわけではない。ただ、スワントンの記述の不正確なところを正し、更に、スワントンが見逃していたハイダ語の音声的な特徴を捕捉するなど、自身が依拠したスワントンの記述に多くの問題点があることは、認識したはずである。しかし、そうであっても、それ以後もハイダ語がナ・デネ語族に属するという主張を撤回しなかったところを見ると、スワントンの記述の誤りを自身で確認したとしても、それが自説に与える影響は小さいと見做していたのかもしれない。

サピアがナ・デネ語族をなすとしたアサバスカ語族、トリンギット語、ハイダ語、更にサピア（Sapir 1915）の後に「発見」されたイーヤック語のうち、トリンギット語は、アサバスカ語族とイーヤック語との間に規則的な語彙の対応がないとして、その帰属が疑問視され、その系統関係を未解決とする立場（Krauss and Golla 1981）、更に、系統不明の言語あるいは下位方言同士の混合言語と見做す説（Leer 1990）も示されたが、結局、最近のリア（Jeff Leer）の一連の研究によって、アサバスカ語族、イーヤック語との間に音対応や同源形式が見出され、ナ・デネ語族に属すると見做すことで決着をみている（Leer 2010）。それに従い、ナ・デネ語族説の議論の焦点は、ハイダ語がナ・デネ語族に帰属するのか、それとも孤立言語として扱うのかに移されるようになった。実際、1950年代や1960年代にもハイダ語の帰属をめぐっていくつかの主張がなされたが（例えば、Hymes 1956; Pinnow 1964, 1968など）、それらの言語とハイダ語の間に、音対応や

構造的な平行性を指摘するにしても、それらが依拠していたのは、相変わらず、信頼度に欠けるスワントンの記述であった。そうしてみれば、サピア説に対する上述のクラウスの評言は、これらの研究にもそのまま当て嵌まるといってよいであろう。

スワントンの後、ハイダ語の記述研究は、長い停滞期に入ってしまう。それは、新たな研究を必要としないほどに、スワントンの記述が全体を網羅していると認識されていたからであろう。しかし、ハイダ語の話者がすでに減少の兆しを見せていた1970年代辺りから、新たにハイダ語の記述がなされ、例えば、ローレンスとリア (Lawrence and Leer 1977) によるアラスカ方言の辞書、レヴィン (Levine 1977) によるスキドゲイト方言の文法記述などの成果が現われるようになってきた。そうした中、スワントンの資料ではなく、自身の調査で得たハイダ語の最新の資料に基づいてナ・デネ語族を再検討したレヴィン (Levine 1979) は、サピア (Sapir 1915) があげていた同系性の証拠を吟味した上で、ハイダ語は、ナ・デネ語族には属せず、孤立言語として扱うべきであると結論付けた。このレヴィン (Levine 1979) は、ハイダ語がナ・デネ語族に帰属しないとする最も有力な説と見做され、実際、例えば、アメリカ先住民諸言語の体系的な概説であるキャンベル (Campbell 1997) やミスン (Mithun 1999) も、レヴィン (Levine 1979) の所説に従って、ハイダ語は、ナ・デネ語族には含まれず、孤立言語であるとしている。レヴィン (Levine 1979) の結論がサピア (Sapir 1915) を否定するのに十分説得力があると見做されたのは、レヴィンの研究によってハイダ語のより高い質の記述がもたらされたことに加えて、クラウスなどによるアサバスカ語族の比較言語学的研究がサピアの時代のそれをはるかに凌ぐほどの進歩をみせていたという時代的な背景もあったと思われる。

一方、マナスター＝ラマー (Manaster-Ramer 1996) は、レヴィン (Levine 1979) の妥当性を検証し、その主張を斥けて、ハイダ語がナ・デネ語族に帰属するとするサピア説を再評価している。同様にグリーンバーグ (Greenberg 1987) もレヴィン (Levine 1979) を批判し、サピア (Sapir 1915) を擁護している。例えば、レヴィン (Levine 1979) は、表1にあげる6つの形式が「過剰に似ている」と却下したのに対し、マナスター＝ラマー

表1 レヴィン (Levine 1979) によって除外されたサピア (Sapir 1915) の対応例

	アサバスカ語族 ⁶⁾	ハイダ語	トリンギット語
11	<i>del</i> 'crane'	<i>di:l</i> 'crane'	<i>du:l</i> 'crane'
33	<i>k'a</i> 'arrow'	<i>q'a:</i> 'harpoon'	<i>q'a</i> 'point'
59	<i>sil</i> 'steam', <i>-sil</i> 'steam'	<i>sil</i> 'to steam'	<i>si:t</i> 'to cook'
78	<i>čoj</i> 'mother-in-law'	<i>jo:n</i> 'mother-in-law'	<i>ča:n</i> 'mother-in-law'
80	<i>č'o</i> 'fir, spruce'	<i>č'u</i> 'cedar'	
83	<i>χa</i> 'goose'	<i>χaha</i> 'mallard'	

(出典：マナスター＝ラマー (Manaster-Ramer 1996: 185) に基づく⁷⁾)

(Manaster-Ramer 1996) は、何をもってそのように判断したのか曖昧で主観的であると批判している。

確かに、マナスター＝ラマー (Manaster-Ramer 1996) が指摘するように、これらの形式が互いに似ているという理由だけで同源形式から排除するというのは論理的ではない。むしろ、類似する形式があるとした場合、その要因のひとつとして借用の可能性を考える必要があるが、レヴィン (Levine 1979) もマナスター＝ラマー (Manaster-Ramer 1996) もその可能性にさえ言及していない。概して、キャンベル (Campbell 1997: 285) が指摘するように、レヴィン (Levine 1979) を批判するグリーンバーグ (Greenberg 1987) やマナスター＝ラマー (Manaster-Ramer 1996) は、サピア (Sapir 1915) が示す類似以外に同系説を支持する新たな証拠を提示しているわけではないので、それだけでサピア説を擁護したことにはならない。しかし、一方で、レヴィン (Levine 1979) の主張も、サピア説の問題点を7つの範疇 (レヴィンは「基準」と称している) に分け、サピア説の論駁を試みているが、たとえサピアのあげている「証拠」の誤りを指摘することに成功したとしても、サピア説全体を破棄するに十分といえるような反証をあげているわけではない。

ちなみに、サピア (Sapir 1915) が同源形式としてあげている98組の形式のうち、ハイダ語が含まれているのは60組である⁸⁾。先に述べたように、いずれもスワントン (Swanton 1911b) によっているものであるが、そのうちの37組については、大体次のような問題が認められる。

(1) サピア (Sapir 1915) における問題のあるハイダ語の形式⁹⁾

a. 存在が確認できない形式

gayl ‘fight’ [23], *tla*: ‘dive’ [41], *sq’aw* ‘to put in a dish’ [74], *jo:n* ‘mother-in-law’ <ji:gunam>, *xaw* ‘to do a thing quickly’ [84] など。

b. 表記の誤り

- *tlan* ‘end’ [42] <tla:n>, *nay* ‘to play’ [53] <na:ŋ> など、長母音が正確に表記されていない。
- *dlga* ‘after’ [44] <dl|ga>¹⁰⁾, *ta-wan* ‘alongside of’ [60] <tawgan>, *sta-* ‘ring-shaped object’ [73] <sda:;>, *kwa-gi* ‘above’ [82] <qwah gi>, *χaha* ‘mallard’ [83] <χa:χa> など、子音の表記が不正確。

c. グロスの誤り

ji: ‘to dive’ [17] <-gi ‘into water’ (suffix)>, *-t’al* ‘back of’ [69] <-t’al ‘downward’ (suffix)>, *gu* ‘there’ [95] <=gu ‘at’(postposition)>

d. 分析の誤り

-n, *-ŋ*[48] に対して ‘general postposition’ というグロスを当てているが、それが何

を示すのか不明である。サピアは、これらの言語の後置詞は、名詞語根と後置詞形成接尾辞に分析する可能性を主張しており (Sapir 1915: 547-548), おそらくハイダ語の後置詞も何らかの名詞語根にこれらの *-n*, *-ŋ* という接尾辞が付いてできたと考えていたのであろう。しかし、ハイダ語の後置詞のなかにおいて、名詞起源で、かつ、このような接尾辞が付いて出来上がったと考えられるものは確認できず、サピアもハイダ語の例は示していない。おそらくアサバスカ語やトリンギット語にみられるとしたその分析を無理にハイダ語に当て嵌めようとしたのであろう。

これら問題のある形式を除いて残る23組がサピア説の証拠として十分であると見做すのはいささか難しい。なぜなら、残る23組の中に偶然の一致や借用によって類似する形式が紛れ込んでいる可能性が排除できないからである。また、トリンギット語の形式についても、ハイダ語に対して指摘したような問題のある形式が多々含まれていることも大いに考えられる。この「予備報告」に次いで出される予定であった長編の論文も、ハイダ語とトリンギット語の資料がスワントンの記述に基づいている限りは、その有効性が疑問視されるような評価しか得られなかったであろう。クラウスがサピアのあげている証拠を「誤表記、誤分析、誤訳と誤解」に基づくと言うのは、表現上の多少の誇張はあるにせよ、ハイダ語に限っても、それだけ多くの例に表記や分析上の問題があるとすれば、サピア説に対する評価としては妥当であると思われる。とりわけ、アラスカで話される先住民の諸言語を、「精緻、厳密、周到」(宮岡 1992: 1024) をもって、共時的にまた通時的に幅広く研究していたクラウスの言だけに、サピアが依拠したのと同じ資料を用いてサピア説を支持しようとする研究者よりも一層の重みと説得力がある。ついでに、サピア説を厳しく批判したレヴィンのハイダ語の研究 (Levine 1977) について触れておくと、スワントンの記述 (Swanton 1911b) よりも質の上でははるかに信頼がおけるが、音韻面でいえば、音節構造と声調の現われの関係を把握しそこねており、また、音声的に違いのある母音の長短の記述を完全に放棄してしまっているなど音韻解釈に決定的な欠陥がある点、また、形態論の面でも分析が不完全なところが多々あることが指摘できる。

20世紀末までのナ・デネ語族をめぐる議論をみていると、サピア説を擁護する側も否定する側も、サピアのあげている証拠の妥当性の検証に終始し、サピア説を離れて、ハイダ語の系統を論じるという試みがなされていないようである。それは、とりもなおさず、ハイダ語の研究がスワントン以降、長い間、等閑に付されていたことに起因する。また、サピア説を擁護する側の多くは、問題とされる言語を直に研究した経験がなく、専ら、公刊された資料、しかも上述のような欠陥を含む資料を唯一の論拠としていたため、新しい証拠を出すというよりも、新たな解釈を提示するに過ぎず、それがまた彼らの限界であったともいえる。当該言語についての知識が不十分であるほど、いろいろな

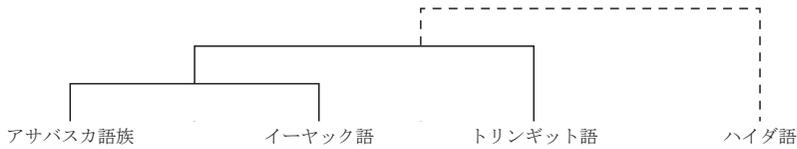


図1 ナ・デネ語族
(出典：筆者作成)

言語をひとつの語族にまとめようとする語族統合 (lumping) の傾向 (Haas 1979: 5) が、サピアをめぐるとこのナ・デネ語族説にも如実に現われているように思う。一方、それらの言語 (の一部) を研究し、一次資料が得られる立場にある研究者の多くはサピア説を否定する側に立っている。関係する言語を直接研究しているか否かによって支持と不支持に分かれるところに、このナ・デネ論争の特徴が現われているといえる。

1960年代以降、アサバスカ語族に関しては、上述の通り、多くの言語が記述され、北米先住民諸言語の中でも比較言語学的な研究が最も発達した語族の1つにまでなっている。また、トリンギット語についても、優れた記述が多く現われ (例えば、Naish 1966; Story 1966; Leer 1991など)、もはやサピアが依拠したスワントンの不正確な記述に頼る必要がなくなった。更に、イーヤック語も含めたナ・デネ語族の比較研究が進められ、現在では、それらの言語が図1に示されるような関係にあるとするのがおおよその共通の理解である。

今日では、「ナ・デネ語族」とした時に、ハイダ語を含むか否かという曖昧さを回避するために、ハイダ語を含む場合は「広義のナ・デネ語族」、ハイダ語を含めない場合は「アサバスカ・イーヤック・トリンギット語族」あるいは「狭義のナ・デネ語族」などと区別するのが一般的である (例えば、Campbell 1997; Mithun 1999など¹¹⁾)。

以上が、ナ・デネ語族説をめぐると1990年代までの状況である。結局、サピアが言う意味でのナ・デネ語族説、つまり広義のナ・デネ語族が成り立つか否かを見極めるには、ハイダ語の記述研究の進展が必要であったが、比較研究を行なうのに十分な成果が得られなかったゆえに、その問題、言い換えれば、ハイダ語の系統問題の解明が停滞したといえる。

3 ナ・デネ語族説 (2) — Enrico (2004) の検討

2000年代に入り、ナ・デネ語族をめぐると問題に関して大きな展開があった。その1つは、長年にわたってハイダ語の記述研究に従事してきたエンリコ (John Enrico) が、自身の研究成果に基づいてナ・デネ語族説を再検討し、その結果、ハイダ語がナ・デネ語族に属することを主張したこと (Enrico 2004)、もう1つは、ナ・デネ語族とシベリアのイエニセイ語族との間に系統関係があるという説が出されたことである (4節参照)。

本節では、エンリコ (Enrico 2004) の説くところを概観し、その問題点を指摘することにする。

エンリコ (Enrico 2004) は、まず、主にハイダ語とアサバスカ祖語 (PA) あるいは前アサバスカ祖語 (Pre-Proto-Athabaskan; PPA)¹²⁾ との間の音韻対応を求め¹³⁾、3.2.2で述べるように、ハイダ語とアサバスカ語族、イーヤック語、トリンギット語の間で形態法 (特に動詞のそれ) が著しく異なるようになったその歴史的な過程を説明するとともに、これらの言語の話者の祖先が (ハイダ語を含む) ナ・デネ祖語の故地からどのような経路を経て現住の地まで移動したかについて推測を試みている。更に、これらの言語の間にみられる形式上の類似が祖語に遡り得る (つまり、同系の証拠と解釈できる) ものか、借用の結果によるものかを慎重に見極め、これらの言語、とりわけ、ハイダ語とトリンギット語、また、わずかながらみられるハイダ語とイーヤック語の間の借用の問題についても論じている。エンリコ (Enrico 2004) は、厳密な手順を経て、ハイダ語がナ・デネ語族に属することを証明しようと試みているが、それだけにとどまらず、同論文は、従来の不正確な表記と文法分析に頼ることなく、ハイダ語の正確な記述を主たる資料としている点において、それまでの研究よりも価値が一層高いといえる。しかし、ハイダ語の記述が正確であるとはいえ、エンリコ論文には十分な説得力をもって主張を展開しているとは言い難い点もいくつかある。ここでは、音対応 (3.1)、形態法 (3.2) についてエンリコの説くところに対する私見をいくつか述べることにしたい。

3.1 音対応における問題点

エンリコ (Enrico 2004) は、ナ・デネ祖語とハイダ語の子音対応として61組 (うち音節初頭における子音対応が39組、音節末における子音対応が22組¹⁴⁾)、母音対応として16組、合計77組の音対応を提示している。更に、それらの対応を示す同源の形式として、ハイダ語の現存する3つの方言 (すなわち、スキドゲイト方言、マセット方言、アラスカ方言)、アサバスカ祖語 (PA)、アサバスカ語族のいくつかの言語 (例えば、アトナ語、チペワイアン語、ヘア語など)、トリンギット語、イーヤック語などの形式を全部で92組あげている (勿論、資料の制約からそれらすべての言語の形式が示されているわけではない)。比較言語学において、いくつかの証拠があれば、問題となる言語の系統関係を証明したことになるのかは大きな問題であるが、一見したところ、77組もの音対応があるのは、ハイダ語がナ・デネ語族に属することを証明するのに十分であると思われる。しかし、それら77組の音対応を仔細に検討してみると、根拠が不十分であったり、音変化に関する説明が場当たりのであったりなど、やはり問題が含まれているように思われる。以下、そのいくつかを指摘する。

まず、指摘すべきは、77組の音対応があるとはいえ、ハイダ語の中でも古態を保存しているとみられるスキドゲイト方言の音素目録のすべてについて音対応を示しているわ

けではない点である。子音音素でいえば同方言の *b*, *dz*, *dl*, *'n*（いずれも表記は Enrico 2004による）に対応する音が示されていない。それらのうち、*b*と*'n*は、現われる頻度が低いので除外するとしても、*dz*と*dl*について触れていないのは如何なる理由によるのか分からない。それらの音素がハイダ語で独自に発生したものなのか、もしそうであるならば、どのような環境において生じたのか説明する必要がある¹⁵⁾。

次に、77組の音対応全体を通じて指摘すべき問題点として、そのうちの34組は、証拠となるべき同源の形式が1組しかあげられていない。更に、そのなかには、次のように、対応そのものさえ疑わしいと思われるものがある¹⁶⁾。

(2) **t' > d* (=E (4))

PA **t'eʔf* 'charcoal': H (S, M) *daas*, H (A) *dáas* 'coals' (=E14)

エンリコ (Enrico 2004: 248) は、「ハイダ語において声門化が消失した理由は不明」としているだけで、なぜこのような音対応があるのか、また、何を根拠としてこの形式を証拠と見做しているのか説明しておらず、この(2)の対応は意味がない。一方、PAの**t'*に対してハイダ語の*t'*が対応 (=E (3)) している場合もあげており、どのような条件下において、PAの**t'*がハイダ語の*t'*や*d*に対応するのかも説明していない。更に、ハイダ語の*d*がPAでも**d*が対応する (=E (1)) というように、(2)とは異なる対応があるにも拘わらず、やはりその条件や理由に言及さえしていない。

他に、次の(3)もPAの**l*がハイダ語の*l*に対応する例であるが、1つの形式しかあげられておらず、「摩擦音が有声化している原因は不明」(Enrico 2004: 252)としている。

(3) **l > l* (=E (16))

PA **l̥agəʔ* 'sibling of opposite sex': H (S) *'l̥agən*, H (M) *'laan*, H (A) *'l̥aaʔan* 'male cross cousin' (=E46)

上と同様、この1つの例をもって音対応があるとするのは無理がある。更に、この(3)については、ハイダ語の形式の末尾に現われる *n* もその由来が分からないとしており、そもそもこれが同源の形式として見做しうるのか甚だ疑わしいと言わざるを得ない¹⁷⁾。尚、PAの**l̥*に対応するハイダ語の音は、*l*だけでなく、*il* (=E (14)) や *l* (=E (15)) もあり、それらは、後続の母音によって対応が異なるとしている。しかし、その対応を示す例としてあげられている形式をみると、意味の面で対応していないもの（後述参照）やそもそも同源の形式と考えるににくいものであり、やはり根拠としては不十分であろう。

音対応のあり方をみてみると、音節末における子音対応の解釈にも問題がある。例えば、音節末には、次のような対応があるとしている（一部のみを掲出）。

(4) 音節末の子音における対応 (唇音と歯茎音のみ ; Enrico 2004: 241)

- a. $*m > m$ (=E (40))
- b. $*d, *t' > d$ (=E (41, 42))
- c. $*dz, *s, *tʃ, *dʒ > s$ (=E (43, 44, 45, 46))
- d. $*tʃ, *t > t$ (=E (47, 48))
- e. $*t > t$ (=E (49))

ハイダ語の音節構造は、アサバスカ語族やトリンギット語、イーヤック語に比べれば単純であるので、その結果、音節末に現われる子音がそれらの言語よりも限られるのは当然である。結果だけをみれば、上のような対応が認められるかもしれないが、ハイダ語において、本来ナ・デネ祖語にあったとされる、それら音節末の子音の区別がなくなった動機が何であったかを説明する必要があるだろう。エンリコは、閉音節からなる接頭辞の末尾の子音が、その後別の子音が続く場合に脱落することが多いとしているが、接頭辞以外の要素においても、音節末に現われる子音の脱落が起きているはずであるから、それをもってハイダ語において子音が脱落しているすべての場合を説明するのは不可能である。それに加えて、エンリコ (Enrico 2004: 243) は、阻害音系列 (とりわけ摩擦音、軟口蓋音、口蓋垂音、声門音) において摩擦音化が生じた結果、ハイダ語では末尾子音が消失したとも指摘している。確かにハイダ語においては、音節末に現われる阻害音系列が $b, d, s, t, h, (\chi)$ に限られるところをみると、エンリコの説明も首肯できるが、それらの末尾子音が一律に消失しただけでなく、別の子音に変化したなどの可能性も考えられるであろう。

更に、アサバスカ祖語 (PA) あるいは前アサバスカ祖語 (PPA) の形式との比較によらずに、トリンギット語やイーヤック語、更にアサバスカ語族に属するいくつかの言語との比較から、それらの形式とハイダ語の形式を同源としている場合があるが、証拠としては弱いと言わざるを得ない。図1に示したように、ハイダ語がナ・デネ祖語から早く分岐したと考えるならば、アサバスカ語族の諸言語とは、それだけ隔たっており、そういった言語との比較からみられる形式上の類似は、やはり慎重に扱うべきであろう。同源の形式としてあげられている92組のうち、そういった有効性の疑わしい形式の組が20組含まれている。

個々の音対応についてみてみると、例えば、アサバスカ祖語 (あるいは前アサバスカ祖語 (PPA)) の $*k$ に対してハイダ語でも k が対応するとしているが、その証拠としてあげられている例がその対応を反映していないように思われる。すなわち、

(5) $*k > k$ (=E (20)) (Enrico 2004: 253)

- a. PPA $*ku'd$; PA $*kʷu'd$ 'seize, take for immediate use'; H (S) xuu 'eat fast' (=E54)

b. PA **kʷuts* ‘thumb’: H *kʷus* ‘butt end’(=E55)

アサバスカ祖語（あるいは前アサバスカ祖語（PPA））の **k* に対してハイダ語の *k* が対応している例をあげるべきところ、ハイダ語の *x* あるいは *kʷ* が対応している例をあげている。後者については、*kʷaay* ‘butt end or handle’ との混交（contamination）によって *kʷ* となったと説明しているが、この説明も根拠が示されていない。

同様に、エンリコは pre-PPA（前前アサバスカ祖語？）なるものを想定し、その **qy* がハイダ語の *k* に対応するとしているが、その例としてあげられているハイダ語では *k* ではなく *q* が現われている。すなわち、

(6) pre-PPA **qy* > *k* (=E (35))¹⁸⁾

- a. PPA **kaʷ* > PA **kʷak* ‘big’: PND **qyaʷ*: H(S) *qun* ‘hard, very’(adverb), H(S, M) *quun-aa*, (S, M) *qwaan* ‘much, many’, H(S, M) *qul* preverb in *quljuu* ‘be lots all over’, H(S, M) *quyaa* ‘be valuable’
- b. PA **kaan*, **kʷan* ‘belly, base’: PND **qya(a)ŋ*: H(S, M) *qan* ‘front of body, torso’(noun, instrumental)

エンリコの説明によれば (Enrico 2004: 240), (エンリコがいうナ・デネ祖語 (PND) からハイダ語が分岐した) アサバスカ・イーヤック・トリンギット祖語 (PAET) では PND の **qy* が軟口蓋音に変化したのに対し, (おそらく PAET から分岐した) 前ハイダ語 pre-Haida では **qy* であり, それが *q* に変化したとしている。しかし, ハイダ語において *q* が更に *k* に変化したとは述べておらず, この (6) で示される変化が起きたとする説明は一切していない。尤も, この変化は, あくまでも試案としてあげているだけで, エンリコ自身, 他の音変化に比べて確固たる証拠があるわけではないことを認めているが, それでも, 例と説明が合っておらず, 全く意味をなしていない。

次に示す **ŋ* と *ŋ* の対応も根拠が分かりにくい。すなわち,

(7) **ŋ* > *ŋ* (=E (54))

- a. PA **vʷin* or **tsʷin* ‘bone’: H (S) *tsʷəŋ*, H (M) *tsʷaŋ*, H (A) *tsʷáŋ* ‘tooth’(=E25)
- b. PPA **sin* > PA **zin* ‘be, have certain characteristics’: H (S) *səŋ*, H (M) *saŋ*, H (A) *sáŋ* ‘say will’(auxiliary verb) (=E33)
- c. PA **tsʷiiy-ee* ~ *tsʷəy-ee* ‘dry spruce branch’: *tsʷəŋgaay* (S) ‘dead branch’(=E30)
- d. Northern Athabaskan **yə-tseeʷ* ‘(dog) bark’: H (S, M) *kiŋ*, H (A) *kiŋ* ‘call’(=E51)

エンリコ (Enrico 2004: 249) は, (7a) の PA の形式の末尾子音 **n* がナ・デネ祖語では **ŋ*

であったと推定し¹⁹⁾、それがハイダ語の *ŋ* に対応するとしているが、ナ・デネ祖語から PA に至る間にそのような音変化があったとする根拠は示していない²⁰⁾。(7b)についても、PA の末尾子音は **n* であるが、ナ・デネ祖語では **ŋ* が再建されると考えているのであろう。ゆえに、ハイダ語の *ŋ* との対応例としているのであろうが、これも根拠がない。更に、(7c) は、PA の **y* は、PPA では **ŋ* に遡り、それがハイダ語のそれと対応すると解釈しているようであるが、PA の **y* が PPA の **ŋ* に由来するという根拠が不明である。(7d) には PA の形式が示されていないが、おそらく同じような推定をしているのであろう。いずれも根拠が示されていないので、(7) の音対応自体が果たして成り立ちうるのか疑問に思わざるを得ない²¹⁾。

エンリコ (Enrico 2004) の説明の中には、俄には首肯しがたいものもいくつか含まれている。例えば、PA の **q* に対してハイダ語の *q* が対応する例として、次の組をあげている。

(8) **q* > *q* (=E (28))

PA **qu* areal prefix: H (S) *qəw*, H (M) *qaw* ‘spreading (smoke, fog, heat, or a mass of individuals or some other substance) (instrumental) (=E68)

PA における ‘areal prefix’ というのは、名詞クラスの標識だけでなく、照応の標識としても機能するものである (Thompson 1993 参照)。一方、ハイダ語の ‘instrumental’ というのは、動作や行為で用いられる道具や手段、その動作の方法を表わす接頭辞であり、少なくとも PA (あるいは、アサバスカ系の言語) の ‘areal prefix’ が持つような機能はない。このように両者が有する機能の間の隔たりが大きいにも拘わらず、その両者を同源と見做す理由が不明である。

エンリコが提示する対応のなかには、そのような機能的な隔たりだけでなく、意味的な隔たりが大きいものもいくつか含まれる。例えば、PA の **daa* ‘mouth, entrance’ とハイダ語の *dəgə* ‘make a certain sound, (liquid) move in a certain amount’ (=E3), PA の **tsáz* ‘be big and bulky, fat’ とハイダ語の *tsə-* ‘full sack-like object’ (classifier) (=E18), PA の **sək* ‘sap’ とハイダ語の *xi* (S) ‘hemlock or spruce cambium’ (=E59) など²²⁾ は、形式はともかく、意味的にも対応しているとは見做し難い。個々の言語における意味の変化を明らかにした上で、こうした対応を指摘するのが理想的であるが、文字による記録がない言語を扱う場合には、意味の変化を辿るのは相当困難である。勢い、直観に頼らざるを得ない側面も多分にあるが、一方で、言語の系統関係を扱う際の意味の問題について、崎山 (2017: 30) は、その文化における地域的な民俗知識によって意味変化を説明すべきであると説く。この線に沿って考えるならば、こうした説明のつかない意味的な違いがある形式を除外するのが無難であろう。

更に、エンリコが示す対応例の問題点として、擬音擬態を表わす形式が含まれていることを指摘しなくてはならない（後述の Campbell and Poser 2008 の指摘も参照）。例えば、

(9) 擬音擬態表現と思われる対応例

- a. PA **diχ^w* > **duχ* ‘amorphous substance move rapidly, container burst’: H (S) *t’uugə*,
H (M) *t’uuga*, H (A) *t’úuga* ‘burst, make a certain sound (suppletive iterative verb stem) (=E15)
- b. PA **L-D-qus-χ*: preverb *q’u(s)* in *q’u-səldə* ‘cough’ (=E67)²³⁾

言うまでもなく、この類いの形式は、偶然の一致ということも大いにあり得るので、言語間の系統関係を証明するには、こうした形式を除外しなくてはならない。このような擬音擬態表現に関わる形式を同源のそれとしているのは、同源と見做している形式92組のうち、(9)にあるのを含めて9組が入っている。更に、上の(9a)はPAの**χ^w*がハイダ語の*Ci*という音連続（*C*は子音）の後において*w*に対応している唯一の例、また、(9b)はPAの**s*がハイダ語の*s*に対応する唯一の例であり、もしこれらがそれぞれの音対応を示す唯一の証拠とすると、その音対応そのものが無効になる。

92組の音対応の例の中には、親族名称がいくつか入っている（例えば、ハイダ語の「祖父 ‘grandfather’」 (=E36), 「義理の姉妹, 義理の兄弟 ‘sister-in-law, brother-in-law’」 (=E45), 「男の交叉イトコ ‘male cross cousin’」 (=E46) など)。親族名称そのものは、同系の証拠となり得るが、エンリコが指摘するように、これらの言語の間で長期に亘る接触があったとすれば、そういった親族名称が借用される可能性も十分考えられるであろうから、ひとまず、親族名称も対応例から除外しておくべきであろう。

以上、指摘したような問題が認められる同源形式を除くと、エンリコ (Enrico 2004) があげる75組の音対応のうち、49組がその対応を支持する証拠がないか、もしくは1つだけとなってしまふ。残る26組の音対応が、ハイダ語がナ・デネ語族に帰属することの証拠として十分かどうかは判断が難しいが、組織的な音対応が得られないことを考えれば、ハイダ語の系統論が決着したとみるにはまだ多くの問題が残されていると考えざるを得ない。

更に、エンリコ (Enrico 2004) はアサバスカ祖語をナ・デネ祖語 (PND) (あるいは、アサバスカ・イーヤック・トリンギット祖語 (PAET)) のそれに近いものと見立てて比較しているが、エンリコ (Enrico 2004) 以後、PAETの再建に関する研究が進み、エンリコ (Enrico 2004) が前提とする祖語における音韻体系にもいくつか修正が施されている。その一例をあげるならば、エンリコは、PAETの**ts*と**tʃ*には、ハイダ語の*k*に対応するものと、ハイダ語の*ts*に対応するものがあるとみている（アサバスカ祖語 (PA) で

はいずれもそれぞれ *ts と *tʃ が対応する)。その違いは、前者が (ハイダ語を含めた) PND の *k に遡るのに対し、後者は (エンリコは明言していないが) PND でも *ts と *tʃ であったという点にある (Enrico 2004: 236-237)。ところが、Leer (2010) は、PA の *ts には、PAET において *ts に遡るものと *ky に遡るものの2種類があるとしており、エンリコのように PND に *k という音を立てるような解釈をとっていない (Leer 2010 のいう PAET は、実質上の PND であることに注意されたい)。とりわけ硬口蓋音系列の扱いは、ナ・デネ祖語の再建における中心的な課題であり (Leer 2010: 174ff. 参照)、こうした研究の進展の如何によっては、エンリコ説の少なくとも一部が無効になることもあり得るのではないかと思われる。

3.2 形態法における問題点

エンリコ (Enrico 2004) は、対象となる言語間における形態法についても比較を試みているが、そもそもハイダ語と他のアサバスカ語族、イーヤック語、トリンギット語 (AET) は、形態法の面で隔たりが大きく、ハイダ語とそれらの言語を結びつけようとするその議論はかなり粗雑である。ここでは、人称代名詞 (Enrico 2004: 261ff.) と動詞形態法の違い (Enrico 2004: 265f.) についてその述べているところを検討してみたい。

3.2.1 人称代名詞

ハイダ語の人称代名詞のうち、ここでの議論に関係する 1 人称と 2 人称を示すと、表 2 のようである (表記は堀のそれによる)。

表 2 ハイダ語の人称代名詞 (1 人称と 2 人称のみ)

		動作者格	目的格
1 人称	単数	<i>laa</i>	<i>dii</i>
	複数	<i>t'aləŋ</i>	<i>ʔiit'ə</i>
2 人称	単数	<i>daa</i>	<i>dəŋ</i>

(出典：筆者作成)

動作者格は、他動詞の主語と自動詞の主語、一方、目的格は、他動詞の目的語と自動詞の主語として用いられる。すなわち、ハイダ語の自動詞は、人称代名詞が主語となる場合に、動作者格を要求するものと目的格を要求するものの2つに分かれる。このような現象を分裂自動詞性という。

エンリコによれば、この分裂自動詞性は、ナ・デネ祖語においてもみられ、アサバスカ・イーヤック・トリンギット祖語においては類別・拡張辞 (classifier-extensor) と呼ばれる動詞に付く接頭辞²⁴⁾と動詞の活用で示されていた。

エンリコは、AET の 3 ないし 4 つあるとされる類別・拡張辞のうち、ハイダ語の分裂

自動詞性と関わるのは、*d*-componentと*y*-componentであるとみる。AETの*d*-componentは、動詞の結合価を減らす役割をし、*y*-componentは、トリンギット語にみられるように、状態動詞を派生する傾向にある（Story and Naish 1973）。そして、前ハイダ語 pre-Haidaは、これら2つの類別・拡張辞 *d*-componentと*y*-componentを人称代名詞に移し、PAETの1人称単数代名詞の* $\chi\alpha$ に付加して* $d+y+\chi$ 、また、PAETの2人称単数代名詞の* $\eta\alpha$ に付加して* $d+y+\eta$ という人称代名詞を作り、それぞれ現代のハイダ語の *dii*（1人称単数目的格代名詞）と *dəŋ*（2人称単数目的格代名詞）へと変化したというのがエンリコの説明である。ハイダ語におけるこれらの目的格の人称代名詞は、主に2つのグループに分けられる自動詞のうち、動作性と制御性という意味特徴を欠く自動詞（例：「病気である」「疲れている」など）の主語として現われるものである（詳しくは Hori 2008参照）。一方、それらの意味特徴を有する自動詞（例：「踊る」「走る」など）の主語として用いられるのが動作者格の人称代名詞であるが、そのうち1人称単数代名詞の *laa* は、PAETの動詞の結合価の増加に関わる *t*-componentにAETの1人称単数代名詞の* $\chi\alpha$ が付いた* $l\alpha\chi$ に由来する²⁵⁾とエンリコは考える。また、2人称単数動作者格代名詞は、目的格の *dəŋ*の末尾の鼻音が消失し（つまり、*dəŋ* > *də*）、その後、1人称単数動作者格代名詞の *laa*の類推によって母音が α から *aa*となり、*daa*という形式が生じたとしている。

エンリコの主張のポイントは、ナ・デネ祖語において動詞語幹の直前に現われる類別・拡張辞とそれに先行する主語の人称接頭辞が、ハイダ語で自立的な目的格の人称代名詞として発達したと想定する点にあると思われる。しかし、その主語の人称標識が類別・拡張辞の後に現われる根拠として、アサバスカ系言語の希求法の動詞語幹において類別・拡張辞が1人称代名詞に先行することをあげているが、それがハイダ語の人称代名詞の発達と関連付けるのはかなり無理がある。更に、ナ・デネ祖語（あるいは、その下位言語であるAET）は、接頭辞が複雑に連続する言語であり、類別・拡張辞や主語の人称標識以外にも、様々な派生接辞や目的語の人称標識、テンス・アスペクト・ムードを表わす要素など、多くの接頭辞がスロットといわれる決まった位置に現われる。一方、ハイダ語は、それらの言語に比べて接頭辞のスロットが少なく、そもそも接頭辞を多用する言語であったという証拠はない（後述参照）。確かに、ハイダ語では、主語と目的語が人称代名詞である場合は、目的語-主語-述語の順序で現われることが多いが、その語順がかつてのナ・デネ祖語の接頭辞の承接順序を反映していると思倣すのは根拠がなく、単なる憶測に過ぎない。仮にAETにみられる類別・拡張辞がハイダ語の1人称単数代名詞と2人称単数代名詞の発達に関わったと仮定したとしても、おそらくPAETには目的語の人称標識が別個に存在していたであろうから、それをもとにして、ハイダ語の目的格の人称代名詞が発達したことも十分考えられるはずである。もし上述のような変化を考えるのであれば、いくつか考え得る他のシナリオを排除した上でないと、やはり説得力

に欠けるであろう。

尚、エンリコは、1人称複数代名詞の目的格は **ʔiid + galəŋ* と推定し、その接尾辞 *-galəŋ* は親族名称などに付く複数を表わすそれと同じとみている。しかし、その **ʔiid* や同じく動作者格の *t'aləŋ* の *t'a* (エンリコは *t'ə* と表記する) については、何に遡るのか不明であるとしている。仮にエンリコの主張する線に沿ってハイダ語の人称代名詞が生じたとしても、これらの要素だけがナ・デネ祖語のそれとは関係なしに別に発達した理由があったとは思えない。従って、エンリコのように一部の人称代名詞だけがそのように発達したとするのは、不自然であると言わざるを得ない。

3.2.2 動詞形態法

先に言及したように、動詞の形態法に関していえば、アサバスカ語族、トリンギット語、イーヤック語はすぐれて接頭辞を多用する言語であるのに対し、ハイダ語は、接頭辞を有するものの、接尾辞を多用する言語である。更に、ハイダ語の接頭辞は、自立的な名詞や動詞に由来すると思われるものも含まれ、音韻的にみても、接尾辞に比べて自立性が高い(堀 2020参照)。エンリコは、ハイダ語の形態法がどのような過程を経て AET とこのような隔たりをみせるように至ったかについて説明を試みている (Enrico 2004: 265f.)。

エンリコは、元来、ハイダ語も接頭辞を多用する言語であったと想定し、そのほとんどを「助動詞」へと転換したと捉える。それらのうち、例えば、方向を表わす要素は、AET では接頭辞で現われるのに対し、ハイダ語では接尾辞である。更に、方向を表わすハイダ語の接尾辞の中には、動詞の語根と同じあるいは関連が認められる形式(例えば、接尾辞の *-ts'ə* 'into' と動詞語根 *ts'ə* 'poke into') があることを指摘し、例えば、*qa* 'walk' という動詞語根に方向を表わす接尾辞が付いた *qa-ts'ə* (walk-into) 'walk in' は、歴史的には、*ts'ə* 'poke into' を主要部とする複合動詞、つまり、**qa + ts'ə* (walk + poke.into) 'go in by walking' のような複合動詞であったと考える²⁶⁾。このような複合動詞は、やがて *qa* 'walk' を「主要部」、*ts'ə* 'into' を「助動詞」のように再解釈され、ハイダ語は、接尾辞型言語へと変化していった。更に、これと同様のプロセスは、動詞的な要素だけでなく、動詞に先行する副詞的な要素にも広く起こり、結果的にハイダ語が接尾辞型言語へ移行したというのがエンリコの説明である。

確かに一部の要素に関しては、文法化によって語彙的な要素が接尾化することはあり得ると思われるが、このような論法で、動詞語根に先行する要素のすべて(あるいは多く)が接尾辞になったと説明するのはいささか暴論であろう。とりわけ、動詞に先行する副詞的な要素が「助動詞」となったとする説については、AET の接頭辞とハイダ語の「助動詞」の間でほとんど同源性がみられないことが指摘されている (Enrico 2004: 298 に引用されている Paul D. Kroeber の言) のに対して、エンリコは、全く説明をしていな

い。

一方で、ハイダ語には動詞語根の前に付く要素（接頭辞や被抱合名詞など）がある。もしハイダ語が他のAETと同様、接頭辞型の言語であったとするならば、それらの接頭辞などの要素にもAETとの間に同源形式が発見されてもよいはずであるが、実際には、そうした例は少ない。そうした少ない例の1つとして、エンリコ（Enrico 2004）は、ハイダ語の類別接頭辞に対してPA（あるいは、アサバスカ系の言語）の名詞や動詞が対応するとして、次のような例をあげている。

(10) **s* > *s* (=E (9))

PA **saax* 'sand, grains', **zaay* 'be granular': H (M) *sii*, H (A) *sii* 'large collection of small identical objects'(classifier) (=E34)

(11) **tl'* > *tl'* (=E (13))

PPA **tl'ay* > PA **tl'a* 'go in a herd': H (S) *tl'ə*, H (M, A) *tl'a* 'group of people, fleet of canoes' (=E42)

(10) はPAの名詞が、一方、(11) はPAの動詞が、それぞれハイダ語の類別接頭辞 *sii-* (*sii-*), *tl'ə-* (*tl'a-*) に対応している例である。ハイダ語の類別接頭辞は、典型的には、自動詞節の主語、あるいは、他動詞節の目的語となる名詞句がどのような範疇に属するかを示す名詞類別の働きを有するが²⁷⁾、(10) のPAの名詞あるいは動詞とハイダ語の類別接頭辞の間の意味的な隔たりは、さほど大きくなく、可能性として全くないわけでもない。しかし、(11) についてみると、もしこのように推定するのであれば、ある段階のハイダ語において、動詞語根に類別接頭辞が付加された形式が動詞+動詞の複合動詞であった時期を想定せざるを得ず、そうになると、どのようなプロセスを経て、前項の動詞が類別接頭辞へと発展したかを説明する必要があるが出てくる。どのような文法化のプロセスがあるのか説明をしない限りは、単純に形式の表面的な類似の指摘にとどまっているというしかなく、上述の接頭辞の「助動詞」化のプロセスと考え合わせると、場当たりの説明に終始していると考えざるを得ない。

3.3 本節のまとめ

エンリコ（Enrico 2004）は、それまで得られなかったハイダ語の信頼し得る資料をもとにして、新たにナ・デネ語族説を検討しているが、このエンリコ説に対して、関連する言語の研究者からの反応はほとんどなく、このエンリコ説を取り上げているのは、管見では、キャンベルとポザー（Campbell and Poser 2008）だけである。

キャンベルとポザー（Campbell and Poser 2008: 281-282）は、それまで得られな

かった質が高いハイダ語のデータをもとにしているだけに、エンリコの主張は見込みがあると評価しつつも、いくつかの問題点を指摘した上で、やはり決定的ではないとしている。まず、彼らが指摘する問題点の1つは、上でも取り上げたように同源とされる形式の中に擬音擬態表現が含まれている点である²⁸⁾。加えて、音象徴的なものもみられる(彼らは、具体的にどの形式が該当するのかは指摘していない)。また、ほとんどの形式が単音節だけの短いものであること、意味的な対応が認めがたいものであること、あるいは、借用と思われる形式が含まれていること(例えば、E27の‘box, pot, carrying basket, plate, dish’など)、更に、育児形式がみられることなどを問題としている。

以上、エンリコ(Enrico 2004)の所説のいくつかを取り上げて検討を試みた。ここでは、その問題点を指摘しただけで、エンリコの主張を無効とするほど、反証となるべきものを提示しているわけではないが、上で述べたような疑問、あるいは、キャンベルとポザー(Campbell and Poser 2008)が指摘するような問題点がある限りは、エンリコの主張によってハイダ語の系統が証明されたとするわけにはいかず、ハイダ語の系統は不明であると結論付けるのが妥当である。仮にハイダ語がナ・デネ語族に属するという主張が正しいものであったとしても、エンリコのあげている根拠は、それを証明するには不十分であるとみるべきである。

4 ナ・デネ語族と他の語族の関係

ナ・デネ語族と旧大陸の諸言語との関係については、古くは、サビアが1920年代から取り組んだといわれるシナ・チベット語族との系統論が有名である。その根拠は、主に構造的な類似性や声調の存在などにとどまり、音対応を見出すまでには至っていない。サビアは、500ページ以上におよぶ『シナ・チベット=ナ・デネ比較辞典』を編んだが、結局、草稿のまま公刊されることはなかった(宮岡 1988を参照)。

他にもナ・デネ語族、バスク語、シナ・チベット語族、イエニセイ語族、北コーカサス諸語をひとまとめにするデネ=シナ=コーカサス大語族(Dene-Sino-Caucasian)なる説もあるが、分けてもとみにアサバスカ系の言語研究者が関心を寄せているのがイエニセイ語族とナ・デネ語族の間の系統関係である。イエニセイ語族にはかつてアリン語、コット語、プムボコル語、ユグ語やアサン語などがあったが、現存するのはケット語だけである。そのケット語は、その周りで話されているウラル語族やアルタイ系の言語と著しく異なり、その系統関係についても、諸説出されているものの、不明のままであった。そうした中、北米先住民の諸言語、わけてもナ・デネ語族との系統関係の可能性を求めたヴァイダ(Vajda 1999)は、これまでの探求が語彙の比較に終始していたことを反省した上で、まず、ナ・デネ語族と他の北米先住民諸言語を分かち構造的な特徴は何か、そして、アジア側にその特徴を共有する言語があるか否かという点を探り、その結

果、デネ・イエニセイ語族 (Dene-Yeniseian) 説を導き出した。

カリとポッターによる論文集 (Kari and Potter eds. 2010) は、そのデネ・イエニセイ語族説を様々な立場から検証することを目的としたものであり、そこに収められた論文が扱う範囲は、言語学から遺伝学、考古学など多岐に亘る。編者のカリとポッター (Kari and Potter 2010: 12) によれば、この説に対する言語学関係の論文の執筆者の反応は、証明されたとするのが4名、見込みはあるが更なる精査が必要とするのが3名、支持するにはまだ不十分とするのが1名である。また、その論文集には寄稿していないが、アサバスカ語学の碩学クラウスやゴラ (Victor Golla) もこの説への支持を表明している (Kari and Potter 2010: 12; Golla 2010)。一方で、いまだ証拠が不十分として批判する立場 (例えば、Campbell 2011; Starostin 2012など) もあるが、旧大陸と新大陸を跨いで系統関係が証明される初の語族としての可能性は、これからも追究されるべきである。

さて、このデネ・イエニセイ語族説を支持する根拠として、ヴァイダ (Vajda 2010a) は、ナ・デネ語族とイエニセイ語族がともに接頭辞を多用する複雑な動詞形態法を有するだけでなく、更に、その個々の構成要素 (とりわけ時制とムードを表わす要素) が同源であることを指摘し、祖語においては、述語が助動詞と主動詞からなり、より分析的であったであろうと推定している。加えて、語彙や文法的な要素の間に音対応を見出し、韻律的な特徴における対応にまで説き及んでいる。

この説については、対象となる言語が多く、また、極めて複雑な問題を蔵しており、その説の当否を見極めるのは、それらの言語の研究者に委ねるとして、この説が表面的な類似の比較に終始していないと思われる点として、3.2.1でも触れたいいわゆる「類別・拡張辞」の問題を丹念に扱っていることがあげられる。ヴァイダ (Vajda 2010a: 55ff.) は、ナ・デネ語族における「類別・拡張辞」²⁹⁾のうち、トリンギット語の *s-* を除く他のナ・デネ語族の「類別・拡張辞」には、イエニセイ語族にもその同源とみられる形式があり、更に、それらがナ・デネ語族において他動性の標識となる以前にどのような機能を有していたかを示唆する痕跡があると主張している。ヴァイダ (Vajda 2010a) は、十分な確証をもった上ではないと断っており、その議論はこれから一層精緻化する必要があるが、ナ・デネ語族に特有で、構造の深いところに沈潜しているとみられるこれらの要素 (Leer 1990) がイエニセイ語族にも見出されれば、これらの言語の系統関係を証明する上でかなり有力な証拠となり得るといえる。

ナ・デネ語族とイエニセイ語族は、地理的に見ても大きく隔たっている。そうした遠く離れた言語同士の間での系統関係の可能性が追究されている中、ハイダ語は、ナ・デネ語族と地理的に近いにも拘わらず、「イエニセイ語族とアサバスカ・イーヤック・トリンギット語族の間にみられる相同的な関係は、ハイダ語にはない」(Vajda 2010a: 35) として、この系統論から除外されている (更に、Vajda 2010b: 111; Comrie 2006も参照)。エンリコ (Enrico 2004) がAETとハイダ語の間にある構造的な隔たりをいくら埋めようとし

でも、やはりそこには、系統関係の証明を阻むほどの大きな溝があるということであろう。例えば、「類別・拡張辞」の扱いについても、ヴァイダ (Vajda 2010a) がかなり細部にわたって議論をしているのに比べて、エンリコ (Enrico 2004) は表面的な類似の指摘にとどまっており、その理解と考察も単純で皮相的である。このデネ・イエニセイ語族が成り立つか否かを見極めるには、今後の研究の進展を俟たねばならないが、ハイダ語とナ・デネ語族、ひいては、ハイダ語とデネ・イエニセイ語族の系統関係が証明される可能性は極めて低い。

5 結び

以上述べてきたように、これまで多くの努力が注ぎ込まれてきたにも拘わらず、ハイダ語は、系統的に孤立した言語であると見做すのが妥当である。しかし、何をもって系統関係が証明されたと考えるのか、あるいは、逆にどのような理由でその系統論が成り立たないとするかの判断は、極めて難しい。なぜなら、比較言語学は、複数の言語が同系であることが分かって初めて成り立つが、それらの言語が同系であるかどうかは、比較言語学的方法によらないと分からないからである (千野 1975)。例えば、ヴァイダ (Vajda 2010a) を批判したキャンベル (Campbell 2011) は、その証拠としてあげられている同源の形式が、言語によって意味的な隔たりが大きいこと、偶然や借用、擬音擬態表現による類似が含まれていることなどを指摘しているが、結局は、その仮説を提示するに至った方法論やプロセスに不備や矛盾があるかどうかを精査することによってその仮説の成否を見極めるしかない。しかし、遠い関係にあると目される言語間の系統を扱う際の方法論について一致した見解があるわけではなく、加えて、その仮説の証拠に対する反証を容易に出せないところに、こうした文字の歴史のない言語の系統関係を扱う難しさがあるといえる。

これまで幾度となく指摘されているように、ハイダ語が話される北アメリカ北西海岸地域は、系統的・類型的に多彩な言語が蝟集しており、他の地域に類をみない複雑な様相を呈する (宮岡 1992)。おそらくヨーロッパ人と接触する前は、交易や戦争、族外結婚などによる2言語あるいは多言語使用があったと思われるが、その正確な実態を知る術はない。ただ、一方で、かなりの程度の言語接触があり、それによって、様々な言語要素が借用されるだけでなく、言語構造そのものへの大きな影響、更には、言語の取り替えなどが起きたことは想像に難くない。そうした中で、複数の言語がある一定の方向に収斂して類似する特徴をみせることもあれば、一方で、それぞれの言語が独自の発展をし、互いに大きな隔たりをみせることさえある (Beck 2000)。自ずと言語間の系統関係が翳んで見えにくくなるような要因がこの地域にはあり、それらの要因を取り除きつつ、言語間の系統論を扱わなくてはならないという困難がつきまとうのが常である。

さて、ハイダ語に限って話を進めると、今後、ハイダ語の系統論を解明するのに必要なのは、ハイダ語の現存する方言からハイダ語の古い姿を再建することである。しかし、現存する3つの方言のうち、アラスカ方言は、18世紀初めにハイダ・グワイーの北部から移住した人たちによって形成されたものであり、その成立が比較的新しく、もうひとつの北部方言であるマセット方言とかなり類似しているの、結局は、マセット方言と南部のスキドゲイト方言によるしかない。両方言は、差異はあるものの、古い時代のハイダ語を再建するほどの隔たりはなく、遡れるといっても、年代的には限界があることが想像される³⁰⁾。実際には、ハイダ・グワイーには、恒久的・一時的な集落を含めれば、100以上の集落があったことが推定されているが（Swanton 1905）、そのほとんどが19世紀に流行った疫病によって住民がいなくなるか、現在のマセットとスキドゲイトに移住したために、それらのかつての集落の間でどの程度の方言的な差異があったのかは知りようもない。従って、ハイダ語を含めたナ・デネ語族を考える際、もし早い段階でハイダ語がアサバスカ・イーヤック・トリンギット祖語（PAET）から分かれたとするならば、PAETと比較し得るほどの古いハイダ語の姿を得ることはかなり難しい。

すでに述べたように、ハイダ語とアサバスカ語族・イーヤック語・トリンギット語には著しい構造的な差異がある。更にハイダ語の周辺をしてみると、地理的に近いツィムシアン語、更に、その南の方にいけば、動詞-主語-目的語の語順をもち、重複法を多用する言語が多くみられるが、ハイダ語はそれらの言語とも異にする（Fortescue 2010も参照）。こうした構造的な違いは、言語の系統を考える上で慎重に扱わなくてはならないが、ハイダ語が周囲の言語と構造的に異なり、また、系統的な関係を明らかにし得ないのは、北西海岸地域の先史とも関わっているのではないかとも思われる。

しかし、北西海岸地域の先史について考えるには、北米先住民の祖先がどのような経路を辿ってアジアから北米大陸に移住してきたかという問題にも目を配らなくてはならない。その移住のルートのうち、北米先住民の祖先がベーリング陸橋を渡り、沿岸部を南下して、北西海岸地域で一定期間定住した後、一部が内陸に向かって移住していったという沿岸ルート説がある（詳しくは、Gruhn 1988などを参照³¹⁾）。更に、それと関連していえば、そうして北米大陸に渡ってきた人々は、元来、どのような言語を話していたのかという問題がある。例えば、サビアは、現在みられる系統的な多様性から、北米大陸に渡ってきた人々は、すでに早い段階において系統的に異なった言語を話しており、更に、全く異なった言語を話す人々が幾度となく移住してきたと推測している（Sapir 1916: 78-79）。もしそうであるならば、ハイダ語を話す集団も、そうしたいくつかの波のうちの1つに属し、昔は、それに近い系統の言語が存在していたが、長きにわたる接触や度重なる角逐などによって、あるいは、ハイダ語がそういった言語を吸収したことによって、同系の言語が消失し、その結果、ハイダ語だけが孤立して残ったということも十分考えられる。

これに関連していえば、やはり孤立言語とされる日本語がオーストロネシア語族とツングース諸語の関与によって形成されたとする崎山 (2017) は、従来の「単系説」(あるいは「単一系統説」)の限界を指摘しているが、それはまた、トリンギット語を系統不明の言語あるいは下位方言同士による混合言語と見做したりア (Leer 1990) の所説 (2節参照) と重なるところがあると思われる。仮にハイダ語を従来の系統論ではなく形成論で捉えようとした場合、そのプロセスに関わったのがどのような言語であったのか、それは現存する言語なのか、それとも死語となってしまったのかを探るのは、多くの困難を伴うことが予想されるが、崎山 (2017) が試みたように、ハイダ語の内部にそれを示唆するような証拠が得られれば、北西海岸地域の先史に新たな解釈がもたらされることにも繋がる。言語学が文化史の研究に寄与する部面が少なからずあると考える所以である。

謝辞

本論文の一部は、国立民族学博物館共同研究プロジェクト「環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究—人類史的視点から」(代表者：岸上伸啓)の2020年度第3回研究会(2021年3月14日)で発表した内容に基づく。岸上先生を始め、研究会でコメントを寄せてくださった方々に謝意を表したい。

本論文は、科研費基盤研究(C)「ハイダ語の統語法に関する記述研究」(代表者：堀博文、課題番号：JP19K00547)、科研費基盤研究(B)「〈語〉の本質に関する総合的研究—孤立型・膠着型・複統合型言語の語形成と句形成」(代表者：沈力、課題番号：JP19H01261)に基づく研究成果の一部である。

注

- 1) これらの数字は、いずれも Dunlop *et al.* (2018) による。
- 2) 1990年代までのナ・デネ語族説に関する諸説については、ピノウ (Pinnow 1976)、クラウス (Krauss 1979)、宮岡 (1989)、デュールとレナー (Dürr and Renner 1995)、マナスター＝ラマー (Manaster-Ramer 1996) が詳しく、本節の記述は、これらに依っている。ちなみに、ハイダ語がナ・デネ語族に属するか否かについて、クラウス (Krauss 1979)、宮岡 (1989) は否定的 (あるいは慎重な立場)、他は肯定的な立場をとっている。
- 3) 「ナ・デネ」というのは、ハイダ語の na 'to live, house'、トリンギット語の na 'people' とアサバスカ語族の déné 'people' による。尚、サビアは "Na-dene" と綴るが、それ以降の研究では "Na-Dene" とするのが一般的なようである。
- 4) 但し、いずれも資料の制約からか、すべての組においてこれら3言語が揃っているわけではなく、2言語の対応を示すだけにとどまっている組もある。
- 5) ナ・デネ語族や北米先住民諸言語の系統分類をめぐるサビアとボアズの間の確執については、

宮岡（1988）が詳しい。

- 6) サビア論文（Sapir 1915）にあげられているアサバスカ語族の形式は、サビア自身が再建した祖語のそれである。その詳細については、この「予備報告」とは別に準備しつつあった長編の論文で示すとあるが（Sapir 1915: 535）、その論文自体が出版されていないので、不明のままである。
- 7) マナスター＝ラマー（Manaster-Ramer 1996: 185）は、サビアの表記を用いつつ、一部アメリカ式の音声字母に置き換えている。サビアが用いている音声字母は、当時、サビアが中心となつてまとめつつあった報告書研究（Boas et al. 1916）によっているが、ここでは、本論文で用いる音声記号に統一して示す。本論文の音声記号は、国際音声字母の慣用に従うが、一部は、アメリカ式のそれも用いる。国際音声字母の慣用と異なる音声記号は次の通りである（[] に国際音声字母による表記を示す）。

ç[ç̥], j[d̥ʒ], y[j], 有声字：無声無気音, 無声字：無声有気音

ここにあげたサビアの表記は、サビア（Sapir 1915）のそれをここで音声字母に翻字したものであり、必ずしも筆者のハイダ語の表記と同じというわけではない。また、表中の番号は、サビア論文（Sapir 1915）に付されたそれを示す。
- 8) マナスター＝ラマー（Manaster-Ramer 1996: 211）が指摘するように、レヴィン（Levine 1979）がハイダ語の形式を含む同源形式を59組としているのは誤りである。残る38組にはハイダ語の形式が含まれておらず、アサバスカ語族とトリンギット語の形式があげられているだけである。
- 9) 括弧内の数字は、サビア（Sapir 1915）の同源形式のそれである。また、< >に堀による音声表記を示す（但し、声調は省く）。
- 10) しかし、後に、ハイダ語を観察する機会を得たサビアは、ここで [l] と表記される音節主音的な側面接近音の存在に気づき、[dlç] のような子音連続が存在しないことを指摘している（Sapir 1923: 152-153）。
- 11) キャンベル（Campbell 1997: 284）は、レヴィン（Levine 1979）までのハイダ語系統論を踏まえて、ハイダ語を含めたナ・デネ語族が成り立つ可能性は0%（自信度は25%）としている。
- 12) 前アサバスカ祖語とは、アサバスカ・イーヤック祖語がアサバスカ祖語とイーヤック語に分かれた後、アサバスカ祖語に至る前段階の言語を指す（Leer 1979; Krauss and Leer 1981などを参照）。
- 13) エンリコ（Enrico 2004）も認めるように、本来であれば、手順としては、アサバスカ・イーヤック・トリンギット祖語（PAET）とハイダ語の間に音韻対応を求めべきであるが、エンリコ自身、PAETの資料が入手できなかったために、ハイダ語とPPAもしくはPA、イーヤック語、トリンギット語を比較せざるを得なかったようである。尚、後述も参照。
- 14) 加えて、ナ・デネ祖語とアサバスカ・イーヤック・トリンギット祖語の間の対応が2組あげられている。
- 15) リア（Leer 2010）が推定するアサバスカ・イーヤック・トリンギット祖語には *dl, *dz がないが、アサバスカ祖語にはいずれも措定されている。リア（Leer 2010: 171）によれば、これら2つの音と tl は、個々の言語において比較的最近になって現われたものである。
- 16) ここでは、アサバスカ祖語の再構形（*で示す）とそれに対応するハイダ語の形式だけを示す。本節の表記はすべてエンリコ（Enrico 2004）によるが、カリ（Kari 2010）を参考に、もとの tsh/tsh' を tʃ/tʃ' に、zh を dʒ に、Gh を ʒ に置き換えた（無声字は無声有気音、有声字は無声無気音を表わす）。また、E(4) などとあるのは、エンリコ（Enrico 2004）における音対応の組の番号、語例の後のE14などは、エンリコ（Enrico 2004）が示す対応例である。言語名の略号

は、次の通りである。PA: アサバスカ祖語, H: ハイダ語, S: ハイダ語スキドゲイト方言, M: ハイダ語マセット方言, A: ハイダ語アラスカ方言。

- 17) ちなみに、この対応について、エンリコ (Enrico 2004: 236) は、「*ʔ*という何らかの形式 (ことによると所有接頭辞)」によって摩擦音が*l*になったと説明しているが、そもそもそのような接頭辞があったという証拠を示していない。
- 18) これらの(6a)と(6b)の同源の形式は、E(35) (Enrico 2004: 240) において対応例としてあげられているだけで、本論文で示すような数字が付けられていない。
- 19) 2種類あるPAの形式は、前者がLeer, Jeff (n.d.) Comparative Athabaskan Lexicon (ms.), 後者はYoung, Robert W., William Morgan, Sr., and Sally Midgett (1992) *Analytical Lexicon of Navajo* (Albuquerque: University of New Mexico Press) による (いずれも Enrico 2004 で引用されているものであり、筆者は未見である)。
- 20) クラウスとリア (Krauss and Leer 1981: 34) が、PAにおいても音節末 (Krauss and Leer 1981 は「語幹末」とする) の位置で **n* と **ŋ* の対立があると推定していることを考えれば、ハイダ語において *ŋ* が現われていることを根拠として、ナ・デネ祖語に **ŋ* を再建するのは無理があるのではないか。
- 21) ちなみに、PAの **n* と **ŋ* がナ・デネ祖語においてそれぞれ **ŋ* と **ŋʷ* に遡ることを支持する証拠として E (55) と E (56) において (7) と同じハイダ語の例をあげているが、これは循環論法であるか、あるいは、ハイダ語と対応することをみせるための牽強附会の主張のように思われる。
- 22) 便宜上、ハイダ語は、スキドゲイト方言の形式のみを示す。
- 23) PAのL, Dは、アサバスカ語学でいう「類別辞」である (3.2.1を参照)。
- 24) アサバスカ語族やイーヤック語における「類別辞」は、他動性に関わる要素であり、いわゆる名詞類別の機能はない。一方、トリンギット語の「拡張辞」は、他動性に関わる機能に加え、わずかでありながら、名詞類別の機能を有する。いずれにしても、ハイダ語の類別接頭辞とは機能が異なる (ハイダ語の類別接頭辞については後述参照)。ここでは、エンリコに倣い、AETに現われるそれらの要素をまとめて「類別・拡張辞」と称することにする。
- 25) エンリコ (Enrico 2004: 263) は、単に「挿入母音」としか述べていないので、如何なる母音を想定しているのかは分からない。ここでは、便宜的に *ə* としておいた。
- 26) 複合動詞における形態素 (語根) の境界を '+' で示す。ハイダ語においては、複合動詞の前項が手段や動作の方法を表わす手段接頭辞へ発展していったと考えられる。
- 27) 3.2.1で取り上げたAETの「類別・拡張辞」とは全く異なる要素であることに注意されたい。
- 28) 本論文では、このような例は9組とみているが、キャンベルとポザー (Campbell and Poser 2008: 282) は13組を数える。
- 29) ヴァイダ (Vajda 2010a) は、アサバスカ語学の伝統に倣い、「類別辞 classifier」と称している。
- 30) リア (Leer 1990: 82; 96) は、トリンギット語は300~500年程度、ハイダ語はその2倍よりも少ない程度まで遡れると見込んでいる。
- 31) この説の前提となっているのは、言語の分岐度は時間の経過の長さと同関関係にあるということであり (Sapir 1916も参照)、北西海岸地域に分布する言語の密度の高さは、それだけその集団の定住の時間的な長さを示す。しかし、この説に対して、例えば、メルツァー (Meltzer 1989) は、言語の分布状況は、少なくともヨーロッパ人との接触以降の記録をもとにしており、それ以前も同じ地域で同じ言語が話されていたとする保証はないゆえに、言語の分岐度と時間の長さは必ずしも同関関係にあるとはいえないと反論している。

参考文献

<和文>

崎山理

2017 『日本語「形成」論—日本語史における系統と混合』東京：三省堂。

サピア, E.

1957 『言語—ことばの研究』泉井久之助訳, 東京：紀伊國屋書店。

千野栄一

1975 『言語学の散歩』東京：大修館書店。

堀博文

2020 「ハイダ語における『語』—音韻面と形態面から」『静言論叢』3: 17-46。

宮岡伯人

1988 「ボアズとサピア—そのいわゆる論争をめぐって」『日本エドワード・サピア協会ニューズ・レター』2: 23-31。

1989 「ナ・デネ語族」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第2巻 世界言語編④』pp. 1453-1457, 東京：三省堂。

1992 「北米インディアン諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第3巻 世界言語編⑤-1』pp. 1004-1078, 東京：三省堂。

<欧文>

Beck, D.

2000 Grammatical Convergence and the Genesis of Diversity in the Northwest Coast *Sprachbund*. *Anthropological Linguistics* 42(2): 147-213.

Boas, F.

1894 Classification of the Languages of the North Pacific Coast. In C. S. Wake (ed.) *Memoirs of the International Congress of Anthropology*, pp. 339-346. Chicago: Schulte. (Reprinted: The University of Chicago Press. Chicago, 1989.)

1920 The Classification of American Languages. *American Anthropologist* 22(4): 367-376. (Reprinted: Macmillan. New York, 1940.)

Boas, F., P. E. Goddard, E. Sapir, and A. L. Kroeber

1916 Phonetic Transcription of Indian Languages: Report of Committee of American Anthropological Association. *Smithsonian Miscellaneous Collections* 66(6):1-15. (Reprinted: Mouton de Gruyter. Berlin, 1990.)

Campbell, L.

1997 *American Indian Languages: The Historical Linguistics of Native America* (Oxford Studies in Anthropological Linguistics 4). Oxford: Oxford University Press.

2011 Review of *The Dene-Yeniseian Connection* by J. Kari and B. A. Potter. *International Journal of American Linguistics* 77(3): 445-451.

Campbell, L. and W. J. Poser

2008 *Language Classification: History and Method*. Cambridge: Cambridge University Press.

Comrie, B.

2006 Workshop in Leipzig Assesses Siberian Connection of Na-Dene. *SSILA Bulletin* 242: 6-7.

- Dunlop, B., S. Gessner, T. Herbert, and A. Parker (eds.)
 2018 *Report on the Status of B. C. First Nations Languages*. Third Edition. Brentwood Bay: First Peoples' Cultural Council.
- Dürr, M. and E. Renner
 1995 The History of the Na-Dene Controversy: A Sketch. In M. Dürr, E. Renner, and W. Oleschinski (eds.) *Language and Culture in Native North America: Studies in Honor of Heinz-Jürgen Pinnow*, pp. 3–18. München: LINCOM Europa.
- Enrico, J.
 2004 Toward Proto-Na-Dene. *Anthropological Linguistics* 46(3): 229–302.
- Fortescue, M.
 2010 Yeniseian: Siberian Intruder or Remnant? In J. Kari and B. Potter (eds.) *The Dene-Yeniseian Connection: Anthropological Papers of the University of Alaska*, New Series, Vol. 5, Numbers 1–2, pp. 310–315. Fairbanks: The University of Alaska Fairbanks Department of Anthropology and The Alaska Native Language Center.
- Goddard, P. E.
 1920 Has Tlingit a Genetic Relation to Athapaskan? *International Journal of American Linguistics* 1(4): 266–279.
- Golla, V.
 2010 Comment on “Agriculture and Language Dispersal: Limitations, Refinements, and an Andean Exception?” *Current Anthropology* 51(2): 184–185.
- Greenberg, J. H.
 1987 *Language in the Americas*. Stanford: Stanford University Press.
- Gruhn, R.
 1988 Linguistic Evidence in Support of the Coastal Route of Earliest Entry into the New World. *Man* 23(1): 77–100.
- Haas, M. R.
 1979 Overview. In B. S. Efrat (ed.) *The Victoria Conference on Northwestern Languages* (British Columbia Provincial Museum Heritage Record No. 4), pp. 1–14. Victoria: British Columbia Provincial Museum.
- Hori, H.
 2008 Semantic Motivations for Split Intransitivity in Haida. *Gengo Kenkyu (Journal of the Linguistic Society of Japan)* 134: 23–55.
- Hymes, D. H.
 1956 Na-Déné and Positional Analysis of Categories. *American Anthropologist* 58(4): 624–638.
- Kari, J.
 2010 Orthographic Conventions for Yeniseian and Na-Dene. In J. Kari and B. Potter (eds.) *The Dene-Yeniseian Connection: Anthropological Papers of the University of Alaska*, New Series, Vol. 5, Numbers 1–2, pp. 347–359. Fairbanks: The University of Alaska Fairbanks Department of Anthropology and The Alaska Native Language Center.
- Kari, J. and B. A. Potter
 2010 The Dene-Yeniseian Connection: Bridging Asia and North America. In J. Kari and B. Potter (eds.) *The Dene-Yeniseian Connection: Anthropological Papers of the University of*

- Alaska*, New Series, Vol. 5, Numbers 1-2, pp. 1-24. Fairbanks: The University of Alaska Fairbanks Department of Anthropology and The Alaska Native Language Center.
- Kari, J. and B. A. Potter (eds.)
 2010 *The Dene-Yeniseian Connection: Anthropological Papers of the University of Alaska*, New Series, Vol. 5, Numbers 1-2. Fairbanks: The University of Alaska Fairbanks Department of Anthropology and The Alaska Native Language Center.
- Krauss, M. E.
 1965 Eyak: A Preliminary Report. *Canadian Journal of Linguistics* 10(2-3): 167-187.
 1979 Na-Dene and Eskimo-Aleut. In L. Campbell and M. Mithun (eds.) *The Languages of Native America: Historical and Comparative Assessment*, pp. 803-901. Austin: University of Texas Press.
- Krauss, M. E. and V. K. Golla
 1981 Northern Athabaskan Languages. In J. Helm (ed.) *Handbook of North American Indians*, Vol. 6, pp. 67-85. Washington DC: Smithsonian Institution.
- Krauss, M. E. and J. Leer
 1981 *Athabaskan, Eyak, and Tlingit Sonorants* (Alaska Native Language Center Research Papers No. 5). Fairbanks: Alaska Native Language Center.
- Lawrence, E. and J. Leer (eds.)
 1977 *Haida Dictionary*. Fairbanks: The Society for the Preservation of Haida Language and Literature and The Alaska Native Language Center.
- Leer, J.
 1979 *Proto-Athabaskan Verb Stem Variation, Part One: Phonology* (Alaska Native Language Center Research Papers No. 1). Fairbanks: Alaska Native Language Center.
 1990 Tlingit: A Portmanteau Language Family? In P. Baldi (ed.) *Linguistic Change and Reconstruction Methodology*, pp. 73-89. Berlin: Mouton de Gruyter.
 1991 The Schetic Categories of the Tlingit Verb. Ph.D. Dissertation, University of Chicago.
 2010 The Palatal Series in Athabaskan-Eyak-Tlingit, with an Overview of the Basic Sound Correspondences. In J. Kari and B. Potter (eds.) *The Dene-Yeniseian Connection: Anthropological Papers of the University of Alaska*, New Series, Vol. 5, Numbers 1-2, pp. 168-193. Fairbanks: The University of Alaska Fairbanks Department of Anthropology and The Alaska Native Language Center.
- Levine, R. D.
 1977 The Skidegate Dialect of Haida. Ph.D. Dissertation, Columbia University.
 1979 Haida and Na-Dene: A New Look at the Evidence. *International Journal of American Linguistics* 45(2): 157-170.
- Manaster-Ramer, A.
 1996 Sapir's Classification: Haida and the Other Na-Dene Languages. *Anthropological Linguistics* 38(2): 179-215.
- Meltzer, D. J.
 1989 Why Don't We Know When the First People Came to North America? *American Antiquity* 54(3): 471-490.

- Mithun, M.
 1999 *The Languages of Native North America*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Naish, C. M.
 1966 A Syntactic Study of Tlingit. MA Thesis, School of Oriental and African Studies, University of London.
- Pinnow, H. -J.
 1964 On the Historical Position of Tlingit. *International Journal of American Linguistics* 30(2): 155-168.
 1968 Genetic Relationship vs. Borrowing in Na-Dene. *International Journal of American Linguistics* 34(3): 204-211.
 1976 *Geschichte der Na-Dene-Forschung*. Berlin: Gebrüder Mann.
- Sapir, E.
 1915 The Na-dene Languages, a Preliminary Report. *American Anthropologist* 17(3): 534-558. (Reprinted: Mouton de Gruyter. Berlin, 1991.)
 1916 *Time Perspective in Aboriginal American Culture: A Study in Method* (Canada, Department of Mines, Geographical Survey, Memoir 90, Anthropological Series No. 13). Ottawa: Government Printing Bureau. (Reprinted: Mouton de Gruyter. Berlin, 1994.)
 1923 The Phonetics of Haida. *International Journal of American Linguistics* 2(3/4): 143-158. (Reprinted: Mouton de Gruyter. Berlin, 1991.)
- Starostin, G.
 2012 Dene-Yeniseian: A Critical Assessment. *Journal of Language Relationship* 8: 117-152.
- Story, G. L.
 1966 A Morphological Study of Tlingit. MA Thesis, School of Oriental and African Studies, University of London.
- Story, G. L. and C. M. Naish (eds.)
 1973 *Tlingit Verb Dictionary*. Fairbanks: Alaska Native Language Center.
- Swanton, J. R.
 1905 Contributions to the Ethnology of the Haida (*Memoir of the American Museum of Natural History*, Vol. 8, Pt. 1). Leiden: E. J. Brill.
 1908 Social Condition, Beliefs, and Linguistic Relationship of the Tlingit Indians. *Twenty-Sixth Annual Report of the Bureau of American Ethnology for the Years 1904-1905*, pp. 391-485. Washington DC: Smithsonian Institution.
 1911a Tlingit. In F. Boas (ed.) *Handbook of American Indian Languages*, Part 1, pp. 159-204. Washington DC: Government Printing Office.
 1911b Haida. In F. Boas (ed.) *Handbook of American Indian Languages*, Part 1, pp. 205-282. Washington DC: Government Printing Office.
- Thompson, C.
 1993 The Areal Prefix hu- in Koyukon Athapaskan. *International Journal of American Linguistics* 59(3): 315-333.
- Vajda, E. J.
 1999 Yeniseian and Athabaskan-Eyak-Tlingit: Some Grammatical Evidence of a Genetic Link. *Sravnitel'no-istoricheskoe i tipologicheskoe izuzhenie jazykov i kul'tur*, pp. 22-34. Tomsk:

Tomsk Pedagogical University.

- 2010a A Siberian Link with Na-Dene Languages. In J. Kari and B. Potter (eds.) *The Dene-Yeniseian Connection: Anthropological Papers of the University of Alaska*, New Series, Vol. 5, Numbers 1-2, pp. 33-99. Fairbanks: The University of Alaska Fairbanks Department of Anthropology and The Alaska Native Language Center.
- 2010b Yeniseian, Na-Dene, and Historical Linguistics. In J. Kari and B. Potter (eds.) *The Dene-Yeniseian Connection: Anthropological Papers of the University of Alaska*, New Series, Vol. 5, Numbers 1-2, pp. 100-118. Fairbanks: The University of Alaska Fairbanks Department of Anthropology and The Alaska Native Language Center.